

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第13号 令和5年(2023年)11月17日発行

暦のうえでは冬となり、朝夕はめっきり寒くなってきました。2学期も残すところ1か月ほどとなり、実践校のみなさんにおかれましては、学期の締めくくりに向けて準備を始められていることと思います。プロ研通信第13号では、X中学校のA先生の学びについて、9月と11月に行ったインタビューからお伝えします。

X中学校 における実践

注目ポイント

課題解決を意識したA先生の学び

X中学校の校内研究

●研究主題

よりよく生きる力を育む学習指導改善「X中 三方よし」の実現に向けて

●目指す生徒の姿

「X中の学力2023」を活用し、以下の生徒の姿を目指す。

自ら学ぶ姿 → 他者と学び合う姿 → 学びを深めていこうとする姿

●校内研究における「共通実践」の方向性や内容

「X中の学力2023」の「研究の視点」を使ったWGでの授業公開と実践交流(ジグソー研修)

A先生の学び

授業アップデートシートから



A先生

●A先生について

第2学年担任で社会科を担当する3年目の教員

●A先生が強みと考えていること

- ・ICTを積極的に活用すること
- ・試行錯誤しながら授業スタイルを柔軟に変えていくこと

●A先生が課題だと感じていること

- ・単元を見通した授業をつくること
- ・生徒が活動に必然性を感じられるように授業をつくること
- ・学びの中で子ども同士をつなげること

●A先生の1学期の学び

- ・授業公開を通して、「めあての内容や提示のタイミング」「グループ活動」「ICTの必然性」「単元を見通した授業づくり」「生徒同士をつなぐ」「主体性を伸ばす活動」「板書の工夫」について学ぶことができました。
- ・全国学力・学習状況調査の結果の分析を通して、第2学年の課題を共有することができた。また、WGでは、特に「自ら学びを調整する力」について協議することができました。

2 学期の実践

●A先生の立てた仮説

「単元を貫く問い」とルーブリックを提示してから単元の学習を始めることで、生徒は毎時間の学習課題や単元で学ぶ内容に見通しをもてるようになり、主体性をもって学習に取り組むことができるようになるだろう。また、単元の最終時に取り組む「単元を貫く問い」に対して、生徒がルーブリックを意識して単元のレポートを作成することで、書く内容や示す根拠などを具体的に捉えることができるようになるだろう。

●仮説を実証する単元

学年：第2学年

教科：社会(地理)

単元について

9月から10月末までの間に、①中国地方・四国地方、②近畿地方、③中部地方の3単元で仮説に基づく実践を行った。

●実践している三つの単元で共通して取り組んでいること

第1時 「単元を貫く問い」とルーブリックを書いたレポート用紙を配付する。

最終時 「単元を貫く問い」に取り組む時間を確保する、もしくは、週末に取り組む課題として設定する。

9月の授業参観での実践と生徒の様子

●参観した単元

中国地方・四国地方

●授業参観に向けた授業者の思い

生徒が、資料とルーブリックを活用してレポートに取り組む姿から「生徒がルーブリックを意識してレポートを作成する姿」を見取ろうと考えています。

●参観した授業の流れ

①復習のための問題を解く(5分)

- ・生徒は復習のための問題を解いてから本時の課題に取り組む。
- ・覚えるべき内容が多い場合、次の時間のはじめに復習の時間を取っている。

②「単元を貫く問い」に答えるレポートを作成するための流れを確認する(5分)

- ・生徒は、前のスクリーンに提示されたルーブリックと手元に配付済みのルーブリック、レポート用紙を見ながらレポートを書くための流れを確認する。

③レポートを作成する(40分)

- ・生徒一人ひとりが、教科書やノートなどを使ってそれぞれのやり方でレポートを作成する。
- ・レポートを書くのに困った生徒は、周りの生徒に聞きながら作成する。



図1 それぞれのやり方で単元レポートを作成する様子

●授業参観を終えて

- ・全体の様子から

ルーブリックを見ながらレポートを作成していた生徒は少数であったため、ルーブリックがレポート作成の助けになるということは立証できなかつたと感じています。

- ・抽出生徒の様子から

今日の授業では、レポート作成時間の40分のうち、35分くらい集中してレポートを作成していました。前の単元(九州地方)の時には、5～10分程度で書き終えていたので、今日の授業では粘り強く取り組んだ姿が見られたと感じています。また、レポートに書かれた分量を比較しても、前のレポートでは数行、今回のレポートでは用紙の8割程度の記述があり、明らかに分量が増えました。このことから、ルーブリックを提示することで取り組み姿勢が変化する生徒がいるのは間違いなさそうだと感じています。

生徒の変化とA先生の自主的な学びのつながり

●生徒の変化

「単元を貫く問い」を3単元にわたって単元ごとに設定しました。1度目に課した九州地方のレポートの提出率と比べて、3度目に課した近畿地方のレポートの提出率は10%以上向上しました。また、提出されたレポートに書かれた分量や内容にも改善が見られます。ルーブリックを意識することで、充実したレポートが書けるようになった生徒も増えました(図2)。

近畿地方 単元レポート

単元を貫く問い：近畿地方における自然環境や歴史的景観の保全は、人口の増加や産業の発展のなかで、どのように取り組まれてきたのだろうか？

産業の発展

近畿地方は阪神工業地帯があり、古くから日本の工業の中心であった。特に、石油化学工業の工場が集中し、これが公害の原因となった。海外からの競争が激しくなり、自国の産業が衰退した。五年は蓄電池、太陽電池、液晶ディスプレイなどの工場が多い。

琵琶湖保全

市民運動が県の行政を動かして、不水道整備や工場からの排水の制限をかけるようになった。1977年には、湖内での合成洗剤の使用を禁止するに成功した。琵琶湖条例が定められる。

琵琶湖

近畿地方は琵琶湖の生活を支えている。しかし、高度経済成長期に発展し、工場や工場が集中し、人口が増えた。琵琶湖は、工業と生活用水が、湖の水質を悪くする原因の一つとなり、水質が悪化した。→ 赤瀬川、アヲ川

森林

紀伊山地は、温暖多雨の古くから森林が盛んであった。これは利権目的の植林が原因。吉野や、尾鷲の杉、柏とヒノキと杉の混交林。山中に制伐し、地区外居住者も、手入れ、林業の技術が受け継がれてきた。

森林保全

- ・ 職の雇用確保、林業の担い手育成のため、技術習得の研修と、国や自治体の補助。これにより、担い手も増え、森林が死滅しなくなった。
- ・ 地産地消、小学校の校舎に、地元の木をふんばり使った。
- ・ 企業の社会貢献活動として、企業も(利益目的の)環境配慮。
- ・ 森林の働き：地球温暖化防止、根による地盤強化、土砂災害防止、生活、農業用水を蓄える。

→ 企業の結果が、森林環境と、企業もが保全する。(経済が下げてきた)

歴史的景観

京都、奈良、若狭の文化、政治の中心地である。古くから、寺、神社、現在も歴史的景観が残り続けている。細部のあり、重要文化財が多い。特に、昔ながらの町並み、寺、神社が多く、世界遺産に登録されているものも数多くある。→ 伝統文化も残る。京都、奈良、若狭時代から行われている祭も。

歴史的景観保全

発展とともに、高層ビルが立ち、伝統的な町並みも壊れている。このままでは、古い町並みも壊れていく。景観の保全に取り組む必要がある。→ 景観条例、景観を壊さないようにする。景観の保全に取り組む必要がある。→ 景観条例、景観を壊さないようにする。

水産資源

近畿地方は、養殖水産物である。特に、養蚕、養魚が盛んである。しかし、水質が悪化し、養蚕、養魚が難しくなった。→ 水質悪化により、養蚕、養魚が難しくなった。

水産資源保全

漁獲量の制限をかけることで、漁獲量、水産資源の回復を目指す。→ 五年は少くも、漁獲量も回復している。

他にも...

環境への配慮として、工業用水をリサイクルし、工場に太陽光パネルを設置している。

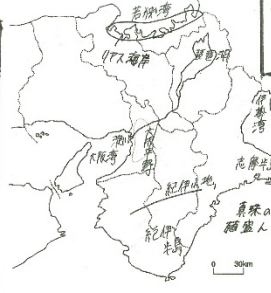


図2 生徒が提出した近畿地方のレポート

●A先生の自主的に学ぶ姿

ルーブリックやレポート用紙の形式は、生徒の提出したレポートに書かれた内容を基に単元毎に改編しています。さらに、校長先生(社会科)や社会科の先生はもちろん、社会科以外の先生にも意見をうかがい、改編の参考にしています。

例えば、「近畿地方における自然環境や歴史的景観の保全は、人口の増加や産業の発展の中で、どのように取り組まれてきたのだろうか」という「単元を貫く問い」に対して、近畿地方の①自然環境の保全②歴史的景観の保全③人口の増加④産業の発展のうち、①か②についてのみ、もしくは③か④についてのみ答える生徒がまだまだ多くいました。このことから、保全のための取組と人口の増加や産業の発展を結び付けることが苦手だと分析しました。そこで、管理職の先生と相談して、関東地方のレポートでは、「単元を貫く問い」を「関東地方における人口の集中は、人々の生活や産業にどのような影響を与えているのだろうか?」とし、枠を矢印でつなげたレポート用紙とすることで、生徒が知識を結び付けながらレポートを作成できるように工夫しました(図3)。生徒が「単元を貫く問い」に答えられるようになることを目指して、生徒の実態に合わせて少しずつ工夫を重ねていこうと考えています。

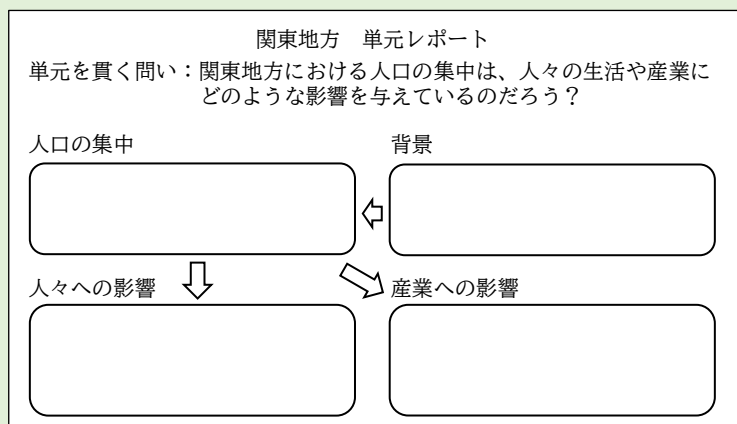


図3 関東地方のレポート *実際のレポート用紙を基に研究員が作成

X中学校の校内研究

校長先生と校内研究主任へのインタビューから、X中学校の校内研究の進め方を紹介します。

1学期から週に一度、校内研究主任は、管理職、主幹教諭と協議を続けておられます。そこから研究推進委員会としての取組の方向性を見だし、校内研究会で共有しておられます。そして、共有した内容を基に、先生方はそれぞれの授業実践へとつなげておられます。

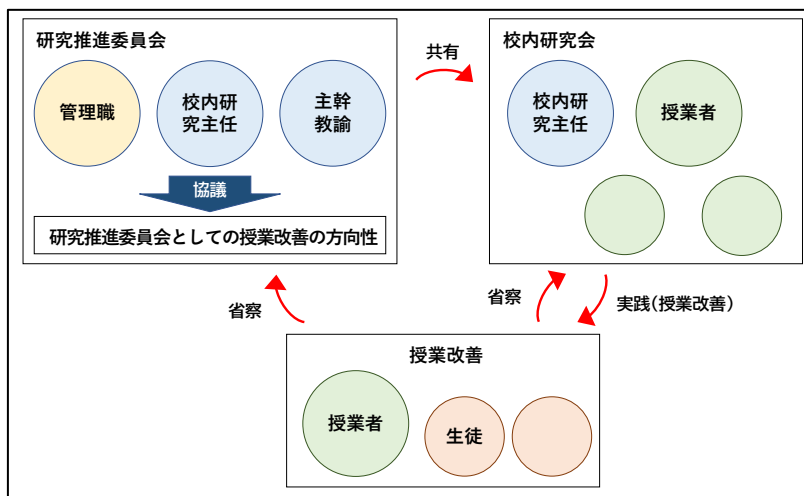


図4 X中学校の校内研究と授業実践のつながり

X中学校の授業参観とインタビューを終えて

今回は、A先生の学びのつながりを追うためにインタビューしていく中で、A先生自身の変化を随所に感じました。例えば、A先生は「生徒が主体的になるために」という思いを出発点として、「単元を貫く問い」やルーブリックを中心に取組を改善し続けておられました。その中で、目指す生徒の学ぶ姿として「知識を関連付けて学ぶ姿」をイメージするようになっていったことが挙げられます。

校内研究主任はインタビューの中で、「校内研究も授業と同じ」と語っておられましたが、何人かの研究委員の先生方とのやりとりで同じ言葉を耳にしました。また、校内研究主任は、「授業するのは楽しいし好き！」とも語っておられ、授業と同じように校内研究を通して少しずつX中にその思いを広めていっていただけるのだと感じました。

提出率やレポートの完成度など見える変化に目を向けがちですが、私はその後、「大切なことは目に見えない」という言葉を思い出すようにしています。そのことで、研究委員や実践校のみならずからいろいろな学び・気づきを与えていただいております。日々感謝しています。「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて、校内研究では何をするのか、一人ひとりの先生は何をするのか、そのあり方を一緒に考えていけると嬉しいです。

